



Title	強度のシステム : 『差異と反復』におけるフロイト解釈に寄せて
Author(s)	本間, 直樹
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2002, 36, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/9549">https://hdl.handle.net/11094/9549</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 強度のシステム

—『差異と反復』におけるフロイト解釈に寄せて—

本 間 直 樹

『差異と反復』第二章はジル・ドゥルーズの最も野心的な物語の一つである。そこでは「反復」と「差異」という二つの概念によってヒューム、ベルクソン、ニーチェが次々と召還され、それぞれが「習慣」としての現在、「純粹記憶」としての過去、「永遠回帰」としての未来という三つの時間の総合へと変身する。しかし驚くべきことに、この三者に導かれて登場するのは若きフロイトであり、瞬く間に彼は三者によって切り裂かれてしまう。そして彼から剔り出されたものは「強度のシステム *systeme intensif*」なのである。

この物語を読み解くにあたって、本来ならば三つの時間の総合についての詳しい検討が不可欠ではあるが、本論ではあえて時間の総合に関する議論をいわば外科的に切除し、そのドゥルーズの思考の断面に浮かび上がる、骨格としての「強度のシステム」概念とその肉であるフロイトの諸概念との関係について考察をおこなう。

## 一 「強度のシステム」の定義

『差異と反復』第二章の「システムとは何か」と題された節において登場する「システム」と「強度」の定義は以下の通りである（なお、「定義一、二」は引用者が便宜的に付したものである）。

（定義一）「システムというものは、二つないしそれ以上のセリー *series* を基礎として構成されるのでなければならず、しかもそれらのセリーはどれも、そのセリーを形成する諸項のあいだの差異によって定義される。」  
 (DR154)<sup>(1)</sup>

（定義二）「諸セリーが何らかの力の作用のもとで連絡しあうと仮定する場合、そのような連絡 *communication* が、諸差異を他の諸差異に関係させる、つまり、システムのなかで諸差異の諸差異を構成することは明らかである。その第二階の諸差異は、『異ならせるもの *differentiant*』の役割を演じる、すなわち、第一階の諸差異を相互に関係させるのである。」（同）

定義一はシステムにとつての第一階の差異を規定している。「諸項」と呼ばれているものは、システムないしセリーにとって本来的な要素とは見なされない。むしろ、「項」にどのようなものが代入されようともシステムないしセリーの特性を決定するのは、それら諸項の差異である。定義二は、セリーを形成する諸差異どうしを関係させる差異、諸差異の差異としての第二階の差異を定義している。この第二階の差異は「暗き先触れ *precursur som-bre*」(DR156)とも呼ばれる。この「先触れ」が、諸セリーを連絡させ、「諸差異を異ならせるものとして作用」し、「おのれ自身の力によつて、それらの差異を直接に関係させる」(DR157)。

ドウルーズによれば、セリーの諸要素の値を規定しているのは「それらが属するセリーにおけるそれらの諸要素間の差異」であると同時に、「ひとつのセリーから別のセリーへ向かう諸要素の差異」(DR15)でもある。このような諸要素は「強度 *intensité*」と呼ばれる。ここでは強度はさしあたり「他の諸差異を指し示しているような差異によって構成される」(DR15)とだけ定義されており、その実質はまだ明らかではない。

以上は強度のシステムの極めて形式的な定義である。ドウルーズはこのような強度からなるシステムの例として、生物、心、社会、等々を示唆しているが、本稿でとくに取り上げたいのが、ドウルーズがこれらの定義の直後に言及している「生物・心的生 *la vie biopsychique*」(DR15)つまりフロイトが『心理学草稿 *Entwurf zur Psychologie*』において提示した「神経システム」である。以下、まず第二節においてフロイトの「神経システム」論の主な点を確認した後、第三節にてドウルーズの解釈を詳しく検討していくことにする。

## 二 フロイト「心理学草稿」における「神経システム」

『心理学草稿』(以下『草稿』と略称)は一八九五年に執筆された未公刊の原稿である。一八九〇年代は「ニューロン(神経元)」理論が確立される時期であるが、若い頃よりゲーウインの進化論に傾倒していたフロイトはそれに先だって独自の仕方で「神経システム *Nervensystem*」の理論を構想し、心や自我の進化的発生の問題に取り組んでいた。『草稿』は「ニューロン」という神経実体からなる神経システムのなかに「意識」や「記憶」を位置づける生物学的な企てであるにもかかわらず、多くの研究が指摘するように、<sup>(2)</sup> その後の精神分析の基幹となる術語体系がすでにそこに登場し、「無意識・前意識・意識」の「第一局所論」および「エス・自我・超自我」の「第二局

所論」の双方の基本的なアイデアが萌芽的なかたちで描かれている。<sup>(3)</sup>

さて、フロイトによれば神経システムは、「互いに区別されながら一様に形成されたニューロン群から構成され」、それらニューロンは他の組織部分と接し、連結し、「流動する量としての興奮」の「伝導路 *Leitung*」を形成する (GWN390)。そして各ニューロンが「一定の量  $\psi$ 」(神経システム内の量) によって満たされるあるいは空になることが「備給 *Besetzung*」と呼ばれる。そしてこの神経システムは以下のような「 $\psi$ 」の三つのシステムから成り立つ装置の働き (GWN405) からなる。

1. まず「 $\phi$ システム」は、外界に接する感覚器官と直接つながり、いかなる抵抗や滞留もなしに量を通じて「透過性ニューロン群」(GWN392) である。この $\phi$ ニューロンは外部からの興奮を様々に分岐させるとともに、 $\psi$ ニューロンの末端に接続されることにより、 $\psi$ ニューロンに量  $\psi$  の一部を転移する。

2. 「 $\psi$ システム」は「非透過性ニューロン群」(同) からなる。これらのニューロンは互いに接触する部位において量通過を制限する「接触制限 *Kontaktschranke*」(同) の働きをもち、それによって量の流れに対し抵抗を示すとともにある一定の量  $\psi$  を保持する。しかし、ある大きな量の通過によって、いわば道が踏み均され、量が通過しやすくなる。それが「通路形成 (開通) *Bahnung*」と呼ばれ、この通路形成だけが量通過の痕跡を「記憶」として残り、興奮量の通過に際して「決定し道を指示する力」となる。つまり「記憶は $\psi$ ニューロン間の諸通路 (形成) の差異によって表される」(GWN393)。そしてこの通路形成は「ニューロンを通過する量  $\psi$  と、この過程の反復の数」(同) に依存する。

さらに通路形成は「 $\psi$  は身体内部からも備給を受ける」(GWN408) ことから生じる。つまり $\psi$ ニューロンは、

「内因性の興奮量がそこで増大する通路と結合して」(同)おり、そこに身体内部からの直接の道が通じている。ここでψニューロンは「量に無防備に晒されている」と同時に、ここに「心的機構の欲動バネ Triebfeder」(GWN408)が位置することになる。つまりこのニューロン群の中に新たに量 $\eta$ が貯えられると同時に、システムの内部に「欲動 Trieb の派生物」としての「心的活動のすべてを維持する原動力 Antrieb」が生じる(GWN410)。このようにψシステムは、量を通過させるがそれ自体は量を保持しない通路(の差異)としての記憶と、通路形成によって連結され身体内部に由来する量を貯蔵するという二つの機能をもつ。そして後者、つまり「備給され、互いに十分に疎通されたニューロンの網」(GWN417)あるいはニューロンの「その時々 $\psi$ 備給の総体」(GWN416)が「自我」と呼ばれる。

3. 「ψシステムの末端は最後に「 $\omega$ ニューロン」に接続される。この $\omega$ ニューロンは量 $\eta$ を受容する代わりに興奮の周期を受け取る。「最小限の量 $\eta$ でしかみだされなにもかかわらず、周期によって影響される」というニューロンの状態こそ意識の根本的な基盤である」(GWN402)。すなわち、量の差異は $\psi$ から $\omega$ を経て $\omega$ に到達することによって質の差異(周期)へと変容し、様々な「意識される感覚」をもたらず。そのなかでもとりわけ重要な感覚が「快と不快」である。不快は「量水準 $\eta$ の上昇あるいは量的圧力の増大」つまり「 $\psi$ のなかの量 $\eta$ の増大の際の感覚」として、また快は「その放出感覚」として定義される。つまり備給の「強度 State」が上昇ないし下降することに応じて $\omega$ ニューロンは不快ないし快の感覚を得るのである(GWN405)。

以上のように、 $\psi$ からなる「神経システム」のうち最も重要な役割を果たすのがψシステムである。このψシステムは興奮量に関して二つの源泉をもち、その内部に量通過の痕跡として通路すなわち記憶を残す。なか

でも重要なものが、外からの刺激によってもたらされる「苦痛体験」と身体内部からの興奮備給とその解放によってもたらされる「満足体験」である。すなわち神経システムは、外界に由来する興奮を不快として回避するのみならず、「飢え、呼吸、性といった諸欲求 *Bédérivisse*」を満たすという「生の窮状 *Not des Lebens*」(GWN390)によつてニューロン内に量を貯蔵するよう方向付けられているのである。<sup>(4)</sup>

### 三 「強度の場」としての「神経システム」

前述のように、ドゥルーズは『草稿』に描かれた「神経システム」を「*la vie biopsychique*」と呼ぶ。しかしそれは、すでにフロイトにおいてそうであったように、神経生理学と心理学のいずれかの対象を指すのではない。そのことは、後年フロイトが論文「自我とエス」において「エス[Es]」と名付け、「神経システム」という生物学的実体から区別された新たな領域を設けたことから明らかである。ドゥルーズが構想するのは「強度のシステム」についての来るべき学であり、ドゥルーズの解釈によれば、『草稿』のフロイトは「エス(Ca)」の概念を先取りしながら、「強度の差異が諸々の興奮といつかたちをとつてそこそこ *ça et là* 配分されるところ」(DR128)つまり「強度の場 *champ intensif*」(DR156)と呼ぶべきものについての理論を提示したのである。以下において、ドゥルーズが『草稿』の神経システムを「強度のシステム」として解釈するうえで欠くことのできない三つの点に絞つて議論をおこなうことにしたい。

## 三― 興奮の結束と自我

『草稿』においてニューロン群はその通路形成によって興奮量の通過ないし「量の流れ」の差異を形成するのであった。いま「ニューロン」や「量の流れ」を単に物質の状態としてではなく機能として理解するならば、神経システムはこのような興奮量の配分の差異によって構成されていること、そして「備給 Besetzung」という特異な概念はまさにそのような量配分の差異に関わることが理解できよう。まずドウルーズは配分以前の「興奮」(つまりゆにおける興奮)を「自由な差異」と呼ぶ(DR128)<sup>(5)</sup>。そしてこの自由な差異としての興奮は不快を避け快を得るために「差異の流動的配分」つまり備給を受け、かつ「結束」の状態に置かれなければならない(同)。ここでドウルーズが着目するのは「結束 liaison」概念である。

そもそも『草稿』における「結束 Bindung」とは備給の特殊な状態、つまり「ニューロンにおけるいわば結束した状態 gebundenes Zustand」 「高い備給を受けながら少量の流れしか許されない状態」(GWN459)を意味する<sup>(6)</sup>。そして「その備給を手放さない、すなわち結束した状態にあるこのようなニューロンの集合」(GWN459)こそが「自我」であった。『草稿』における最も重要な点は、こうした自我の形成が「満足体験」と結びついていることである。満足体験はその痕跡である「願望像 Wunschbild」をシステムの内に残す。そしてこの願望像の「前もつての備給」によって生じる「欲望の反復状態 Wiederholungszustände der Begier、つまり期待において、最初の自我 anfänglichen Ich が生育し発展する」(GWN459, 強調引用者)とフロイトは考えたのである。

結束したニューロンとしての自我の役割は満足体験の反復を望み期待を形成することにある。ドウルーズによれ

ば、自由な差異として散在する興奮の結束は、想起という能動的な再生や注意に先立つ「反復の情熱 passion」つまり「ハビトゥス（習慣）」としての「受動的総合」(DR128)として解釈される。

例えば、目はすでに「見る自我」(同)である。生物は目を形成することによって、波長の差異として散在する光を身体の表面（網膜）において興奮としての差異に変える。そしてこの諸興奮がさらに結束の受動的総合を通して、見たい、食べたいなど、快の反復を求める「諸欲動」へと生成する(DR129)。したがってドゥルーズによれば、このような自我は、能動的想起や注意に先立つという意味で「受動的」であり、自己同一性をもたず特定の感覚と結びついているという意味で「部分的」であり、フロイトが「原初の」と形容するように「幼生 [larvaire] である」(同)。

しかしながら自我を常に単数形において語るフロイトと異なり、ドゥルーズはこのような自我が複数であると考える。「エスは局在する諸自我によって満たされている。」(DR129) ドゥルーズ自身はこの点についての明確な根拠をあげていないが、この解釈の鍵となるのは、まずフロイトの論文「自我とエス」に登場する身体の「表面の投射」としての「身体的自我 ein körperliches Ich」 「身体—自我 ein Körper-Ich」 (SA3:294f) という考え方である。この論文では「無意識」のトポスとして新たに「エス」概念が導入され、「自我」は「エス」の表面に位置するものとして定義される。英訳者の註によれば、自我は身体的な感覚、主として身体の表面に由来する感覚から生まれるとフロイトは考えていたようだが、それはまさに「草稿」から一貫して考えられていたと言うべきであろう。<sup>(7)</sup> その間フロイトは「性理論三篇」(一九〇五)などにおいて「口唇欲動」「肛門欲動」など、身体表面に分散する諸感覚と結合する「部分欲動 Partialtrieb」概念を導入しているが、こうした部分欲動が所謂「性器段階」において統

合される以前に共存することが認められるかぎり、それぞれの感覚快ないし器官快と結びつく仕方でも自我が複数で分散しているという解釈は不可能ではないだろう。

### 三二 「満足体験」——知覚と表象の差異

前項でみた自我と結束について、ドゥルーズは「結束は由來する満足は必然的に自我自身の幻覺的満足である」(DR129)と述べている。このドゥルーズの議論を理解するためには、「草稿」における「満足体験」の議論を厳密に理解しなければならない。

すでに述べたように、何らかのきっかけによって(フロイトは明確に「他者の助けによって」(GWN410)と書いている)もたらされた「満足体験」は神経システム内に「満足の反復」としての「欲望状態 Begierdezustände」を生じさせ、それが「欲望状態と期待状態へと発展」する(GWN452)。この欲望状態とは自我に対して次のような過程をもたらす。「欲望による緊張が自我を支配していて、その緊張が続くと欲しい対象 geliebte Objekt (願望表象 Wunschvorstellung) が備給を受ける。」そして知覚備給とともに、この表象が現実であることの証明としての標示が得られる時まで、「その放出」つまり快の感覺は「延期されねばならない」。「さらにこの表象と同一あるいは類似する知覚が到達すると、この知覚は、そのニューロンが願望によって前もって備給されていた vorbesetzt) ことを知るのである。「中略」さらにその上、表象と生じる知覚とのあいだの差異が思考過程にきつかけを与えるのであるが、この思考過程は、過剰な知覚備給が発見された通路にそって表象備給に移されると終結する。つまりこれとともに同一性が得られるのである。」(同、強調引用者)

難解な箇所であるが、重要な論点は以下のようになるだろう。まず、欲望状態の特徴は、満足を与える対象が知覚される（知覚備給）に先だって「願望表象」が備給を受けるという点にある。そして満足体験の反復を求める欲望状態は、必然的に知覚と表象の二重化、差異をもたらず。最後に、そしてこの差異の形成と解消こそが欲望の対象の同一性を規定する。ここでの最大の問題は、願望表象と知覚はともにニューロンの興奮（備給）に従う限り、両者の混同は原理的に避けられないことである。知覚と表象の非類似性に着目するのは唯一「自我の阻止」を通じてなされる「判断 Urteil」（GWN423）だけであるが、こうした「判断」が功を奏するのは「二次過程」であって、それに先行する「一次過程」および「一次的願望備給は幻覚的性質をもつ」（GWN435）のである。

満足体験の反復（欲望）は常に表象ないし願望備給を迂回して知覚（対象）に向かう。しかし強度に備給され、幻覚にまで発展した願望表象は、ある対象の享受における知覚備給によっては満足しない。ここにラカンのいう「欲望 *desir*」と「欲求 *besoin*」の区別が位置する。<sup>(8)</sup>「快原理 *Lustprinzip, princip de plaisir*」と欲望（願望）の反復は、もはやすでに得られた快の反復ではなく、決して一致しない知覚と表象の差異の反復を展開する。そしてここに「差異と反復」に関するドゥルーズの根本的洞察との共鳴を聴き取ることが難しくない——つまり反復とは「同じもの」の反復ではなく、差異を巻き込む反復である。

### 三—三 「遷移」と「対象 = x」

前項で確認したとおり、「欲望」ないし「願望」ははじめから対象の二重化を孕んでいる。さらにドゥルーズはこの二重化に「現実的对象 *objets réelles* と潜在的対象 *objets virtuels*」という表現を与える。一方で幼児は興奮

の結束という段階を越えて、「ひとつの対象の定立」(DR132)に向かう。そのような対象は、例えば「努力の目標としての母」、つまり「現実において」能動的にたどり着くべき項として母」(同)であり、それが「現実的对象」と呼ばれる。他方で、幼児は「そうした現実的活動の進歩や失敗を統制し補償するようになる潜在的对象あるいは虚焦点 *foyer virtuel* に自ら成る」(同)。そのような潜在的对象とは、例えば幼児が「おしゃぶり」をしながら抱く「潜在的な母」である。このように幼児は「現実的な対象のセリー」と「潜在的な対象のセリー」という二重のセリーに沿って自身を構築する(同)。「草稿」に還って理解するなら、こうした「現実的对象」としての母と「潜在的対象」としての母の区別は、最初の満足体験の反復つまり「欲望の反復状態」における知覚される母と表象としての母の区別に他ならない。

またドゥルーズによれば、二つのセリーは独立しているのではなく、潜在的对象は現実的对象のなかに「体内化」されている。つまり潜在的对象は自分の身体や他人の「身体の諸部分」や「玩具、物神 *reïche*」として現れる。より正確に言えば、それは現実的对象のなかの「その対象に欠けたままの潜在的な半身」として現実のなかに植え込まれている(DR134)。またドゥルーズは、ラカンの「失われた手紙」についてのセミネールへの言及しながら、潜在的对象は「おのれの場所に在りながら移されて *deplace* いる」(DR135)とも規定している。つまり、潜在的对象は様々な現実的对象のセリーを循環しながら自らのセリーを形成するが、それを可能にしているのは、「*déplacement*」の働きにはかならず(DR140)。

この *déplacement*, *Verschiebung* とは何か。「草稿」においてはニューロン間の量の配分(備給)の変化が「遷移」として規定されていた。こうした「遷移」は、耐え難い表象Bの代わりに表象Aが意識されること、すわ

《Verschiebung》とは、「一次過程」においてこの象徴形成とともに、表象Bのニューロンにおける強度が表象Aのそれへと遷移することを意味する。この点を踏まえるならば、ドゥルーズが「遷移させられるもの」としての潜在的対象に「対象 $\parallel x$  (Objet $\parallel x$ )」という奇妙な定義を与えているのは十分領けることである。つまりドゥルーズにとって《displacement》は代入を意味するのであり、「対象 $\parallel x$ 」は対象でありながら同時に変数であるものなのである。<sup>(9)</sup>

ドゥルーズはこの「対象 $\parallel x$ 」という概念によって精神分析における「反復」の問題に重要な解釈を加えている。フロイトはすでに『草稿』において、過去の体験がそれに類似する新しい現在のなかで反復されること、しかも反復の核心となる出来事（フロイトはそれがもつぱら性的な出来事であると指摘している）の記憶が忘却され（回想の抑圧）、それに隣接する別の表象に移り変わっていること（遷移）について詳しく考察していた(GWN446ff)。

こうした幼児期の出来事と成人期のその間の反復の問題は、二つの出来事がそれぞれ成就する異なる現在のあいだの反復として、つまり古い現在となった過去の体験が新しい現在のなかで反復されることとしてしばしば理解される。しかしドゥルーズによれば、「反復は、ひとつの現在からもうひとつの現在へ向かって構成されるのではなく「 $\parallel$ 」(DR138)。「二つの現在をむしろ、それらとは別の本性をもちながら、それらのなかで絶えず循環し遷移する潜在的対象に関係しながら共存する二つの現実的なセリーを形成している」(同)。幼児期と成人期の二つの異なる出来事によってそれぞれ構成される二つのセリーの共存が意味しているのは、その「どちらが根源的でどちらが派生的だということを示し得ない」(DR139)ということである。二つの異なるセリーを関係づけているのは、二つ

の出来事、二つの現在のあいだの類似性や同一性ではなく、潜在的对象である。反復は「むしろ、潜在的对象（対象Ⅱx）の関数としてそれら二つの現在が形成している共存する二つのセリーのあいだで構成される」（DR138）。ここでドウルーズが「対象Ⅱx」と呼ぶものは「心的外傷『Trauma』」にほかならない。事実フロイトは「草稿」において指摘しているように、「心的外傷」はある現在において生じた体験の記憶ではなく、「ある回想が事後的に nachträglich のみ心的外傷となる」（GWIN448）のである。このような心的外傷に代表されるような「対象Ⅱx」は、反復において絶えず遷移する、「おのれ自身の同一性において欠けてもいれば、おのれの場所にあつて欠けてもいるもの」（DR157）であり、そこそが、遷移しながら異なる二つのセリーを連絡させる「暗き先触れ」、つまり「強度のシステム」における第二階の差異なのである。

### 結

最後に、以上の議論を再度「強度のシステム」の定義に関連してまとめておこう。外からのものであれ内からのものであれ「興奮」は「強度のシステム」における第一階の差異をなす（DR155）。そして、想起を可能にするだけでなく、異なる諸知覚、諸表象のセリーを連絡させる「通路形成」こそ、第二階の差異、つまり異なるセリーを関係させるものとしての「暗き先触れ」である（同）。そして明らかにしたのは、ドウルーズのいう「強度のシステム」とは、「大文字の自我『Je Moi』」（DR131）の統合に先立つもの、つまり「神経システム」における「一次過程」としての「無意識のシステム」（DR163）を意味することである。このシステムは、第一に「差異的かつ反復的 differential et hiératif」、つまり「興奮」という微少な諸差異とその「結束」からなり、第二に「セリーの

「serial」つまり「通路形成」と「遷移」によって互いに関係しあいながら共存する異なる諸セリーを形成し、最後に、「欲望」が現実的対象における「欲求と満足」を越えてそこに欠けている潜在的对象を追い求めるという意味で「問題のかつ問いかけ的 *problématique et questionnant*」なのである (DR143)。

しかしその一方で、ドゥルーズによれば、こうしたシステムは様々な項や主体を巻き込む「間主観的無意識」(DR162) でなければならぬにもかかわらず、フロイトは自我の単数性に固執することによって、同じひとつの主体のなかの諸セリーが収束してしまふ「主体の独我論的無意識」(同)にとどまってしまう。この点に関しては、特に本論で扱うことのできなかつた「死の欲動」および「抑圧」と「否定」についてのドゥルーズの批判を検討することが不可欠である。これを今後の課題として今は論を閉じることにする。

## 註

(1) 本文中に引用する主な文献には以下の略号を使用する。

Gilles Deleuze *Différence et répétition*, P.U.F. 1968.

DR

Sigmund Freud *Gesammelte Werke*, Nachtragsband, S. Fischer 1987.

GWN

*Studienausgabe*, Band 3, S. Fischer.

SAS

(2) 例えば、石澤誠一『翻訳としての人間』(平凡社、一九九六年)など。

(3) もっとも、生物学的概念に依拠した『草稿』はその後のフロイトの目には極めて不十分なものとして映ったに違いない。それにもかかわらず、筆者はフロイトがその死に至るまで人間の生の生物学的・心理学的両義性を本質的なものとして手放さなかつたこと(例えば「欲動とその運命」「快原理の彼岸」(SAS3所収)などを参照せよ)を極めて重要と考える。つまりフロイトは精神分析理論とともに単なる心理学を越えて生物学的であると同時に心的で

もあるシステムに関する学を構想しようとしたのであり、それは、ドゥルーズがしばしば用いる言葉に従えば、物質と精神の二元論の彼方に「精神の物理学」を構想することを意味したはずである。

(4) さらにまた、 $\psi$ システムにおいて願望備給と防衛の行われる「一次過程」と、その過程が「自我の阻止」によって調整される「二次過程」とが区別され(GWNN422)、それが後の『夢解釈』において「無意識／意識」の区別になつていく。

(5) これはエスの内部で移動する「遷移エネルギー Verschiebungenergie」(SA3:312)としても理解できる。

(6) ただしこの量の「結束／結束解除 Bindung / Entbindung」という使用法と「備給」の関係はフロイト自身においても不明確なままである。こうした「結束」概念の曖昧さと問題点についてはラプランシュ・ポントリス『精神分析用語辞典』(村上訳、みすず書房、一九七七年)の「拘束」の項を参照。

(7) このようなフロイトの「表面としての自我」という考え方を発展させたものとして、Didier Anzieu, *Le Moi-peau*, Bordas, 1985 (福田素子訳『皮膚—自我』言叢社、一九九三年)を参照せよ。

(8) 例えはラカンはセミネールXI巻において『草稿』を参照しながら、「欲動的要請 [l'exigence pulsionnelle] と「欲求 *desoin*」を区別している。「対象を捕まえること」によって欲動はいわば、おのれが満足するのはまさにそれによつてではならぬ、とらうことを学ぶ。いかなる *Not*、欲求の対象も欲動を満足させることはできないからこそ、そもそも欲動においては議論の始めから、*Bedrhnis* と *Not* とが、つまり欲動的要請と欲求とが、区別されていぬ。」Jacques Lacan, *Le séminaire livre XI, Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*, Seuil 1973, p.153

(9) これがまさにラカンの言う「象徴的ファルス」であることをドゥルーズは認めている (DR136)。

(文学研究科講師)

**Le système intensif:  
sur l'interprétation de Freud dans *Différence et Répétition***

Naoki HOMMA

Gilles Deleuze définit «le système intensif» dans le deuxième chapitre de *Différence et Répétition* comme suit: un système se constitue sur la base de deux ou plusieurs séries, chaque série étant définie par les différences entre les termes qui la composent (les différences de premier degré). La communication entre les séries rapporte des différences à d'autres différences, ou constitue dans le système des différences de différences (les différences de second degré). On définit des «intensités» comme les éléments propres au système, qui valent à la fois par les différences de premier degré et par celles de second degré.

Selon Deleuze, Freud a présenté dans son *Entwurf zur Psychologie* (1895) la vie biopsychique, c'est-à-dire le système nerveux sous la forme d'un tel champ intensif, où se distribuent des différences déterminables comme excitations (Erregung), et des différences de différences, déterminables comme frayages (Bahnung). Il a montré que la liaison des excitations et frayages rendent possible la répétition du désir, qui lui-même recherche la répétition de la satisfaction.

C'est la formation du désir qui double la satisfaction et fait la distinction entre l'objet du besoin et l'objet du désir. Deleuze les appelle respectivement «l'objet réel» et «l'objet virtuel». L'objet virtuel a pour propriété d'être «déplacé» quand il est à sa place. La répétition du désir se constitue entre les séries réelles coexistantes qui se forment par rapport à l'objet virtuel, lequel ne cesse de circuler et de se déplacer en elles. Le désir apparaît comme une force de recherche, questionnante et problématisante, qui se développe dans un autre champ que celui du besoin et de la satisfaction.

Le système de l'inconscient freudien est donc considéré comme le système intensif, qui est différentiel et itératif, sériel, problématique et questionnant.

キーワード：強度 システム 満足 欲望 欲動